
優しい嘘

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい嘘

【コード】

N6109A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

彼女は優しく嘘をつき続ける。私は全てを知った今でも彼女のことを愛していられるだろうか。

肩が触れ合う度に、憂鬱になっていくのが分かった。
私は知ってしまった。

何度も、何度も何度も…今だって彼女は私を愛してはくれない。

それは、地球が太陽の回りを回っているという事実と同じように確かな事なのだ。

ある一定の間隔でシナプス回路は運動神経を刺激する。

しかし、やはりそれだけのこと。

彼女の言葉はいつも嘘に満ち溢れていて、それでいて酷く優しい。

その優しさは私の心臓をえぐって、海の一番深い所へ沈める。彼女が私に、愛していると言う度に、それよりも彼女が何倍か愛しているあの男の事を思い浮かべるのだろう。

「どうしたの？」

偽りの笑顔、しかし清く。

「ああ、仕事のことですらトラブったことを思い出してさ」

急に現実に還った私は、手元にあったアイスコーヒーがすでに空っぽになっていることに気付いた。

「…水、君の分も持って」

「もういいよ、あなた疲れてるみたいだし、帰るわ」

「すまない、じゃあ駅まで送っていくよ」

私は心の中で焦っていた。

言い出せなければそれでも良いと思った。

ただ、憎いというよりも寂しい。

駅まで数分の道のりをゆっくり歩いた。

「こないだのデイズニerlandは楽しかったのかい？」

「うん、三回も同じ乗り物に乗ったんだよ」

まるで、仲の良い恋人のように他愛のない話をして笑った。

例え、その話が作り上げた嘘だったとしても…

彼女が改札口を出て、こちらを向いた。

私は彼女の見ている前で携帯電話を取り出した。

「あの晩、君は健治と一緒にいたのかい？」

「そうよ」

予想していた通りの返事が帰ってくる。

「そして健治はいつも君の側にいる」

「そう、健治は私の部屋に居る」

雑踏の中、君はまっすぐにこちらを見ている。

「君の押し入れの中で横たわっている」

躊躇することなく私は言った。

「いいえ、彼は生きている。」

「そう思っているのは君だけだ。あれはもう、ただの腐った肉塊だった」

「ごめんなさいね。浮気してて、でも私はあなたの事も同じぐらいに愛しているわ」

「君はそうやって優しく嘘をつく」

「もう帰らなくちゃ、健治の為に今日はハンバーグを作るの」

電話から耳を離して、前を見る。すでに、そこに彼女の姿はなかった。

あれから一週間。行方不明になった親友の死体の記事が新聞に載ったことはまだない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6109a/>

優しい嘘

2010年10月21日21時25分発行